

2020年8月14日（金）日本経済新聞 静岡版 朝刊

# 高齢者の転倒 離床予測で防ぐ

介護総合支援事業のインフィック（静岡市）は人工知能（AI）で高齢者の離床を予測するサービスを始めた。介護施設や自宅に住む高齢者の転倒を未然に防ぎ、介護職の駆けつけなど負担も減らせるのが特徴だ。こうしたシステムの開発は全国で初めてという。



システムの画面にはセンサーによる高齢者の動作や心拍数のほか、室温や湿度なども表示される（イメージ、写真上）。AIが高齢者の離床を予測し介護職員の端末に通知する

## インフィック、AI活用

高齢者の室内に設ける複数のセンサーの情報をAIが分析し、介護職や家族の携帯端末に通知する。ベッド内のセンサーは脈拍や寝返りなど体の姿勢を把握する。室温、湿度、電気の照度や部屋の中での動きを感知するセンサーも使う。

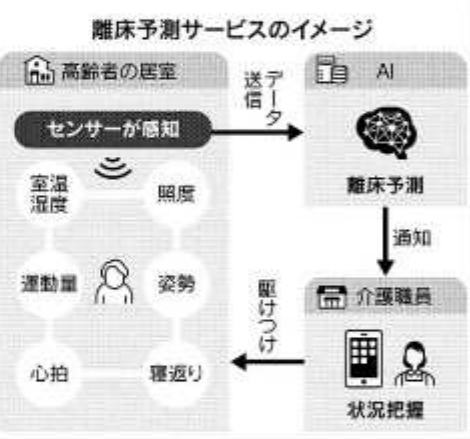
AIは収集するデータを過去と比較し、30分以内の離床の予測につなげる。同社が運営する介護施設で蓄積してきた入居者のデータも組み合わせ解析する。深夜に電灯を

## 駆けつけなど介護負担減



介護老人ホームは転倒をいかに防ぐかが課題だ。一般の離床通知システムはベッド下の床に体重を感知するセンサーを置く場合が多い。ただ、夜勤で職員が駆けつけた際には既に転倒していることもあるなど、危険を事前に察知するのは難しくかった。転倒を未然に防ぎ、寝たきりにつながりかねない事故を防ぐ。

消したまま動く回数などをとくに認知症の傾向を把握できるほか、湿度と温度から熱中症のリスクの通知も可能だ。認知症の人が入居するグループホームや特別養



減れば職場の魅力も高まり、就労希望者の増加も期待できる。料金は初期費用が1室1万9800円（税別）からで、1カ月9800円（同）の使用料が別途必要だ。介護施設の運営業者だけでなく、賃貸マンションを運営する不動産会社にも孤独死予防の観点から導入を促す。高齢者の消費者にも個別に販売する。営業は顧客網が広いNTT東日本と2019年末に提携し、依頼するの

も特徴の一つだ。通信関連の営業と合わせインフィックの離床予測サービスも同時に提案してもらった。このほかにも医療・介護関連の商社や大手企業との連携も進める。高齢化は今後加速する見通しだ。静岡県内は総人口に占める65歳以上の割合が4月1日時点で前年比0.4ポイント増の29.5%と過去最高だった。35市町の過半数の18市町で高齢化率が30%を超えた。国は高齢者が住み慣れた場所で暮らせる地域包括ケアを進めており、在宅介護の需要は高まる。増田正寿社長は「少子高齢化が進めば特養などハコモノの整備には財政的にも限界がある。県内だけでなく全国の過疎地に住む高齢者の在宅ケアに貢献したい」と話す。

井当の宅配会社などとの連携も進める。離床予測サービスにオプションのメニューを加え、たんばく質など高齢者に不足しがちな栄養に配慮した弁当なども定期購入でできるようにする。